

マレー世界における華語作家の国家構想

ルー・ポーイエと1940年代のインドネシア文芸界

篠崎 香織

はじめに

1950年代以降、マラヤの華語出版業界では、マレー語の学習を促進したり、マラヤおよびインドネシアのマレー語文学作品やその作家を紹介したりする出版物や刊行物が一大コンテンツとなっていた。これらの出版活動を支えていたのは、華語文芸世界の中で育ちながらマレー語を習得した華人知識人であった¹⁾。

その中心の1人に、ルー・ポーイエ (Lu Po Yeh/魯白野) がいる。ルーは本名を李学敏といい、ほかにも威北華、樓文牧、華希定、越子耕、范濤、姚遠などのペンネームで執筆した。ルーは1959年に世界書局からマレー語・華語・英語の辞書『実用マレー語・華語大字典』(実用馬華英大字典) を出版した。さらに、1960年に『星洲日報』が開始した特集欄「国語周刊」の編集を担当し、1961年に刊行した華語とマレー語の2言語による月刊誌『マレー語月刊』(Majalah Bahasa Melayu/馬來語月刊) の編集をアブドゥッラー・フサイン (Abdullah Hussain) とともに担当した²⁾。

ルーは、マラヤ、スマトラ島、ジャワ島を流浪しながら少年期・青年期を過ごした。こうした流浪の遍歴の中で培った多言語・多文化的な精神は、近年マレーシアおよびシンガポールで再評価されつつあり、ルーの著作の再刊が相次いでいる³⁾。2016年にはマレーシアの有人出版社が『威北華文芸創作集』を刊行した。2019年にはシンガポールの周星衢基金が『馬來散記』と『獅城散記』を刊行した。これらの再刊とともに、ルーに関する研究も増えてきている。

本論は、これら近年の刊行物や研究に基づき、1948

年前半にシンガポールに拠点を定める以前のインドネシアでの経験を記したルーの著作のデータを整理し、インドネシアでのルーの軌跡を整理する。またインドネシアでの経験に基づくルーの作品に対して、どのような評価がなされているのかを整理し、インドネシアを題材としたルーの作品を紹介する。インドネシアでの経験を記した作品は、『流星』、『春耕』、『夜明け前の行脚』(黎明前的行脚) の3作に収められており、本論ではこのうち随筆集『春耕』を中心に取り上げる。

1. ルーの著作

ルーの著作のうち、書籍として刊行されたものは表1のとおりである。

ルーの著作は、書籍の他にも新聞・雑誌に掲載されたものがある⁴⁾。そのうちインドネシアとの関係でまとめたものに、「インドネシア文学講座」(印尼文学講座) がある [魯 1960]。これは、テレビ・シンガポールの番組「東方民族文化の紹介」でのルーによる連続講座「インドネシアの文化」を『南洋商報』および『星洲日報』が文字に起こして掲載し、それをまとめて『南洋文摘』に再録したものである。ルーによる連続テレビ講座は1960年6月17日から週1回、計10回放送された。テレビ放送の翌日にその内容が『南洋商報』および『星洲日報』に掲載された。テレビ、新聞、雑誌を通じて、多くの視聴者・読者がルーの講座を目にしていたものと思われる。

ルーの軌跡はルーの著作からたどることができる⁵⁾。表2～表4は、それぞれ『流星』、『春耕』、『夜明け前の行脚』に収められた作品の一覧と、作品に登場する地名である。

1) 概要については [篠崎 2020] を参照。

2) ルーは1961年4月26日夜に心臓発作で亡くなった。享年38歳であった。『マレー語月刊』はしばらく停刊したが、新たな編集者を得て刊行を再開し、1970年4月に停刊するまで110号を刊行した [Yang 2006: 242-243]。

3) 再刊されたルーの著作は、もとの内容をそのまま復刻したものではなく、ジャンルやテーマごとに著作の並び順が編集された再編集版となっていて、注釈が付いているものもある。

4) これ以外にも新聞や雑誌に掲載されたルーの論考は多いが、それらは先行研究においてもまだ十分に整理されていない。今後の課題である。

5) ルーの軌跡を整理したものに [張 2016] および『獅城散記』と『馬來散記』双方に収められた年表 [周星衢基金 2019] がある。これらは1945年から1948年のルーの軌跡について説明が異なる部分がある。

表1 ルーの主な著作物一覧

著者名	タイトル	日本語訳	ジャンル	出版地	出版社	出版年	収録作品数	再編集版との対応
魯白野	獅城散記	シンガポール雑記	随筆	シンガポール	世界書局	1953年	56作品	『獅城散記——新編注本』周星衢基金、2019年
魯白野	馬來散記	マラヤ雑記	随筆	シンガポール	世界書局	1954年	26作品	『馬來散記——新編注本』周星衢基金、2019年
魯白野	馬來散記・続集	マラヤ雑記・続	随筆	シンガポール	世界書局	1954年	30作品	『馬來散記——新編注本』周星衢基金、2019年
威北華	流星	流星	小説	シンガポール	南洋商報社	1955年3月	14作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
威北華	春耕	春耕	随筆	シンガポール	友聯図書公司	1955年9月	28作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
魯白野	馬來巫	マラヤ	地誌概説	シンガポール	世界書局	1958年		
威北華	黎明前的行脚	夜明け前の行脚	小説、詩、随筆	シンガポール	世界書局	1959年12月	39作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
魯白野	印度印象	インドの印象	随筆	シンガポール	世界書局	1959年	29作品	
魯白野	実用馬華英大辞典	実用マレー語・華語・英語大辞典	辞書	シンガポール	世界書局	1959年		
樓文牧	愛詩集	愛詩集	詩	シンガポール	世界書局	1960年	37作品(ルー「婚後悲歌」のみ)	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年

出典：[張 2016:i-iv; xiv-xv]。

表2 『流星』収録作品と舞台背景

タイトル	日本語訳	発表時期	ジャンル
黒心桃	黒い種		小説 ポゴール
南中国海的波浪	南シナ海の波		小説 シンガポール
南燕北雁	南の燕と北の雁		小説 メダン
橋	橋		小説 メダン
一人的山	一人の山	1948	小説 ジャカルタ
流星	流星		小説 シンガポール
歌女和蚕	歌う女性と蚕		小説 シンガポール
遺失了的青春	失われた青春		小説 シンガポール
没有火的寓言	火のない寓言		小説 ブラジル
戦塵抄	戦塵抄		小説 デリ
黒色巷	黒い路地		小説 シンガポール
今天还不是春天	今日はまだ春ではない		小説 吉靈湾(パンコール?)、ペナン、イポー、ブラワン、メダン
刮風底春	風が吹く春		小説 バリ
逃亡	逃亡		小説 メダン

表3 『春耕』収録作品と舞台背景

タイトル	日本語訳	節タイトル	日本語訳	発表時期
早春	早春			nd
記憶底巷	記憶の中の路地	年青的島	若い島	nd
		河上的陽光	川の上の陽光	nd
		雷	雷	nd
		稻的舞踊	稻の踊り	nd
		先達道上	シアンタールの道の上	nd
一條街的山城	一本道の山の町			nd
畢業了的農人	卒業した農夫			nd
南方的河	南方の川			nd

タイトル	日本語訳	節タイトル	日本語訳	発表時期	
茂物小住	ボゴールでの滞在			nd	バンドン、ボゴール
高原短歌	高原短歌	馬達山上	ブラスタギにて	nd	メダン、バンドルバル、ブラスタギ、シバヤック山、トバ湖
		没有鸽子	鳩がない	nd	ブラスタギ
		山城天亮了	山の町に朝が来た	nd	ブラスタギ、メダン
郷間小札	田舎の小さな手紙			nd	インドネシアの田舎村
普羅米修士的苦痛	プロメテウスの苦痛			nd	
春天的潮	春の潮	初春的蜗牛	初春のかたつむり	1953年	
		年青的獅子	若い獅子	1953年	
		回憶,寂寞	回憶,寂寞	1953年	
太陽的孩子們	太陽の子供たち			nd	
春天兩題	春の二題	窗外的霧	窓の外の霧	nd	
		漳宜灘	チャンギビーチ	nd	チャンギビーチ(シンガポール)
初秋之旅	初秋の旅	馬六甲的村落	マラッカの村落	nd	マラッカ
		詩的芙蓉	詩的なスレンバン	nd	スレンバン
		捕魚人家	魚を捉える人たち	nd	マラヤ東海岸
		無名鎮	無名の町	nd	
		歸途	歸途	nd	
山城的窗	山の町の窓	黎明底湖	夜明けの湖	nd	
		太平山上遠眺	タイピン山の上からの遠望	nd	タイピン
		古城的古廟	古都の古廟	nd	マラッカ
		漁村小歌	漁村の短い歌	nd	
内地去来	内地を去来	出發前後	出發の前後	nd	シンガポール
		柔佛行脚	ジョホール行脚	nd	ジョホール
		米南加保民族的拓殖	ミナンカバウ人の植民	nd	ヌグリスンピラン
		慾情濃重的城市	欲望が濃厚な街	nd	クアラルンプール
新春・夜雨	新春・夜の雨			nd	
永遠年青的陌生人	永遠に若い見知らぬ人			1954年	
傻子哲学	バカの哲学			nd	
想思草	想思草(たばこの異名)			nd	
啊哈、海！	ああ、海よ！			1948年 5月	インドネシア、シンガポール、カトン(シンガポール)、パシールバンジャン(シンガポール)、マラッカ海峡
星夜絮語	星の夜の長話	星加坡河	シンガポール川	nd	
		星	星	nd	
		摩天楼	摩天楼	nd	
		噴水池	噴水池	nd	
		地球的中央	地球の中央	nd	
早班車	早朝列車			nd	
芒果樹結実的時候	マンゴーが実る頃			nd	
夏月箋	夏の手紙	不老湾	ブラワン	nd	メダン、ブラワン、デリ川
		綿蘭鎮	メダンの町	nd	メダン駅
		帶信的人	手紙をもってきてくれる人	nd	
		荒村的木偶	寒村の操り人形	nd	バタック人の寒村、サモシル島、トバ湖
雨降落在平原上	雨が降る平原で	春午後的	春の午後の	nd	
		生與死	生と死	nd	
		四月草	四月草	nd	
花園	花園			nd	
酒吧間	バー			nd	
晚会	夜会			1948年	ジャカルタ、ボゴール、チリウン川

表4 『黎明前の行脚』収録作品と舞台背景

タイトル	日本語訳	発表年	ジャンル	舞台背景
吹起喇叭的孩子	ラッパを吹く子ども		小説	シンガポール
負傷兵	負傷兵		小説	マラン
稲的穂的青春	稲の穂の青春		小説	シンガポール
戦俘	戦争捕虜		小説	ジャワ、ボゴール、バンドン
暗流	暗流	1948年	小説	メダン
問題先生	めんどうさん		小説	
筆友	ペンフレンド		小説	
兵同志	兵士仲間	1948年	小説	ボゴール、スカブミ
手	手	1948年	小説	シンガポール
伸訴	申し立て	1948年4月	随筆	シンガポール、スマトラ、ジャワ
我還年青	私はまだ若い	1948年5月17日	随筆	メダン、ペナン
遅行草	行き遅れた草	1950年夏	随筆	
雨来的時候	雨が来る時	1952年7月	随筆	
印尼印象	インドネシアの印象	1953年夏	随筆	インドネシアの山地、パレンバン、ムシ川、バタンハリ
思想的劇	思想の劇	1954年4月	随筆	
写実的詩	写実的な詩	1954年春	随筆	
万里夢、憂鬱的夢	万里の夢、憂鬱な夢	1955年夏	随筆	ムンレンブ(万里望)、ラハット、プシン
秋天寄簡	秋に届いた手紙	1956年8月	随筆	山の中の町
黎明前の行脚	夜明け前の行脚	1957年8月	随筆	コースウェイ、ジョホールバル、バトゥパハ、ムアル、クラン、マラッカ、アイルヒタム、スレンバン、タイピン、ペナン、プダス、ポートディクソン、
写给日里河的詩	デリ川に捧げる詩	1948、ジャワ	詩	メダン、デリ川、ブキバリサン
潮	潮	1949	詩	
深海、更闊的海!	深い海、広い海	1949	詩	
十月感想	十月の感想	1950	詩	
遥寄	遠くへの手紙	1950秋	詩	シンガポール川
期待	期待	1951年2月	詩	
海嬰	海の赤子	1951年4月	詩	
歲月底樹	年月を経た木	1952年元旦	詩	
对星抒情	星への抒情	1952年3月	詩	
遙遠的雨	はるか遠い雨	1952年春、クアラ ルンブール	詩	
窗前的床	窓の前のベッド	1952年、クアラ ルンブール	詩	
石獅子	石の獅子	1952年マラッカ	詩	マラッカ
夏月短柬	夏の短い手紙	1952年	詩	デリ川
淡水河	淡水河	1953年8月	詩	ジャカルタ、淡水河(?)
沈黙	沈黙	1953年10月21日	詩	
無名塚	無名の墓	1953年11月	詩	
黎明小唱	夜明けの小唄	1954年6月	詩	
城與年	町と年	1955年5月21日	詩	
黎明寄簡	夜明けに送る手紙	1955年11月	詩	ペナン
十四行詩	十四行の詩	1957年2月	詩	

2. インドネシアでのルーの軌跡

ルーは1923年4月21日にペラ州イポーで生まれた[張 2016: xvii]。初等教育をイポーのユックチョイ学校(育才学校)という華語学校で学んだ後、父親と共にペラ州内をラハット(Lahat)、ムンレンブ(Menglembu)、カンパー(Kampar)、タンジョンランブータン(Tanjong Rambutan)と移り住んだ後、ペナン、マラッカ、シンガポールに移り、1936年頃にスマトラ島にわたった[魯 2019: 24]。

ブラワン港からメダンに移り、メダンにしばらく

滞在した。その間、メダン周辺の高原地域にしばしば足を延ばした。バンダルバルを経てブラスタギを訪れ、高原の木々や草花、高原で迎える日の出、遠くに望むシバヤック山などの景観を楽しんだり[ブラスタギにて]⁶⁾、トバ湖を訪れてシガレガレの操り人形を鑑賞したり[寒村の操り人形]、シアンタールを訪れたり[シアンタールへの道のりにて]していた。また、アサハンに1年滞在して教員を務めた時期もあった[卒業した農夫][生と死]。

日本軍が1942年3月にメダンに進駐すると、スマ

6) 根拠となるルーの著作を角括弧で示した。タイトルは表2から表4の日本語訳に対応している。

トラ島内陸部に避難した。ブラウレット [一本道の山の町]、キサランとアサハンの間の菜園 [雷]、アサハン、アイルジョマン [卒業した農夫] など複数の場所を転々とした。この間、1943年秋に父親を亡くしている [生と死]。日本の降伏をブラスタギで迎え、メダンに戻った [山の町に朝が来た]。

ルーは1945年から46年にかけて、メダンで華語新聞社の記者を務めた [魯 2019b: 305]。その後、パレンバンを経て [南方の川]、ジャワ島にわたり、1946年のどこかのタイミングで軍に入隊した。「ああ、海よ！」には、6か月山地で任務にあたった後、1947年9月ようやく除隊できたとある。

「ああ、海よ！」にはどの軍に入隊したのか明示されていない。これに対して『夜明け前の行脚』所収の「戦争捕虜」には、主人公の「私」がイギリス・オランダ連合軍ジャワ本部で日本軍の武装解除と日本人戦犯の情報収集に従事したとある。「戦争捕虜」は小説に分類されるが、ルーの実体験を書いたものとして読むこともできる。「戦争捕虜」には、イギリス軍が撤退し、オランダ軍が戦後処理を全面的に引継いで以降、「私」の仕事の位置づけが大きく変わったとある。イギリスは1946年11月にインドネシアから撤退しているため、「私」がルーだとすると、ルーは1946年11月よりも前に入隊していたことになる。

オランダ軍の下で働くこととなった「私」は、オランダが植民地という古い制度を復活させようとしているだけだと感じて除隊を申し出た。しかしそれは聞き入れられなかった。「私」は8月にボゴールの山地で任にあたり、その後、バンドンとボゴールの間でインドネシア軍に捉えられ、捕虜になった [戦争捕虜]。おそらく、ルーは捕虜になったことで9月ようやくオランダ軍からの除隊が認められたのであろう。

『獅城散記』所収の「古い墓地参り」に、ルーは1947年にジャカルタの興華実験学校⁷⁾で教員をしていたとある [魯 2019a: 283]。このことから、ルーは除隊後すぐにジャカルタに移ったと思われる。『夜明け前の行脚』所収の「夜会」の終わりに「1948年、ジャカルタにて」と記されており、1948年のある時期までジャカルタにいたようである。シンガポールで書かれた「ああ、海よ！」の最後には「1948年5月」と記されており、この時期までにはシンガポールに戻っていた。

7) 同名の学校の存在は確認されていないとの指摘がある [魯 2019a: 286] が、胡適が台北で創刊した『自由中国』という雑誌の第10巻第10期に、ジャカルタに二十数校ある自由義校の1つとして興華実験学校の名称を確認することができる [片 1954, 22]。中華民国と関係が近い学校であったと思われる。

3. 21世紀に注目される意味

ルーに関する研究が進展したのは2010年代以降のことである。シンガポールとマレーシアで書かれた華語文学 (以降、馬華文学) は研究の蓄積がかなり厚いが、馬華文学研究では2010年代以前にルーの研究はほとんどなされておらず、また、馬華文学界でもルーはあまり知られていなかった [王 2019: 7; 9-10; 22] [張 2016: xxix-xxxiv]。

ルーに関する研究は、文学的な視点からのものと歴史的な視点のものがある。文学的な視点に立つものにウォン・ユンワー (Wong Yoon Wah / 王潤華) の研究がある。ウォンの研究はルーに関する本格的な研究として、最も早期の研究に位置づけられる。ウォンは、2012年7月にマレーシアのラーマン大学で開催されたシンポジウム「時代、文学的規則、本土性: 馬華現代詩歌国際学術シンポジウム」(時代、典律、本土性: 馬華現代詩歌国際学術研討会) で、「逆流する詩の河——威北華の流浪と廢墟の写生」(倒流的詩河: 威北華流亡與廢墟書写) と題する報告を行い、詩を中心にルーの作品を論じた。2019年に再刊された『獅城散記』と『馬來散記』にはウォンが序文を寄せており、詩を中心にルーの作品を以下のように紹介している。

ルーの作品には、中国文学の伝統と、西洋文学に由来するモダニズムと、インドネシア文学に由来する個人主義とロマン主義が混在している。1930年代から40年代のインドネシア文学には、西洋文学から吸収したモダニズムとインドネシア文学に由来する個人主義とロマン主義とが融合した作品が現れていた。インドネシアを流浪する中で、ルーは、当時のインドネシア文学の作風を吸収するとともに、インドネシア文学を介して西洋文学由来のモダニズムも吸収していた。その媒介者となったのが、当時インドネシア文学をけん引していたハイリル・アンワル (Chairil Anwar) であった。ルーはハイリル・アンワルと親交をもち、貧困や苦しみ、傷や痛み、死などを生と対比することで生命の強さを描いたハイリル・アンワルの作風にも影響を受けた [王 2019: 10-12]。

ウォンは、馬華文学はジャンルやテーマで作品を分類して批評する傾向があるため、文学ジャンルの複数の要素が混在し、中国、東南アジアの華人、西洋、マレー世界の各要素が混在するルーの作品を審美するすべがなかったと指摘する。そのうえで、ルーの作

品に内包される混成性を評価する視点を持つことの重要性を説く[王 2019: 8-9; 17]。

『威北華文芸創作集』の編者テオ・キエンフン (Teoh Kian Hoon/張景雲) は、2012年のシンポジウムでウォンの報告に触発され、2008年以来手元にあったルーの著作を再編集して出版するに至った[張 2016: iii]。同書に寄せたテオの序文は、ルーの軌跡を最も丁寧にたどった研究の1つである。テオは文学的な視点からルーの作品に迫る。ルーの作品は時代の精神を反映しているが、他方で、マラヤの風土と社会に則した文学を追求すべしとした1940年代の馬華文学界の方向性にあまり縛られず、時代の精神の外側で独自性を発揮し、自身の想像力で創作したと評価する[張 2016: xi; xlix]。

歴史的な視点からルーを分析しているのがゴー・シウポー (Goh Siew Poh/呉小保) である⁸⁾。ゴーはルーについて以下のように論じる。マラヤの独立が近く中でルーと同時代の人たちはマラヤを祖国ととらえるようになった。知識人たちはアイデンティティを転換したのみならず、新たな国家形成に参加しようとした。国語であるマレー語を自らの言語として位置づけ、多民族を橋渡しする共通語として創出しようとした。ルーが1950年代に立て続けに著作を刊行したのは、新たな時代におけるマラヤの挑戦について整理し思考する過程であり、ルーはペンによる著作を通じてマラヤの建国に参加した[呉 2015]。

しかしマラヤは、ルーたちが構想したかたちで建国されたわけではなかった。マラヤはマレーシアとシンガポールに分かれた。両国ともマレー語を国語としているが、マレーシアではマレー語はマレー人という特定の民族と結びつく言語として位置づけられることが多く、シンガポールでは英語中心の国家形成が進展した。これについてゴーは、今ある社会のあり方とは異なる構想が見いだせるからこそ、ルーの時代の人たちの努力を再考する必要があると指摘する。ゴーは、今日の我々は一國、一民族、一文化の

境界内に自己を閉じ込めすぎていると批判的に見る。これに対して、マレー語を核とした1つの国家マラヤの建設を夢見て、インドネシアの文化発展に注目していたルーおよび同時代の人たちは、より広いマレー世界とつながろうとしていたのであり、それは1つの境界内に自己を閉じていく発想とは逆のものであったと論じる。こうしてゴーは、ルーおよび同時代の人たちの試みに思いを馳せることで、今日の自分たちの発想を相対化しようとする[呉 2015]。

文学研究においても歴史研究においても、ルーが既存の見方や視点を相対化する存在として注目されていることがわかる。

4. ルーとハイリル・アンワル

ルーとインドネシア文学とをつなげた媒介者としてしばしば名前が上がるのがハイリル・アンワルである。ハイリル・アンワルはインドネシアで「1945年世代」の先駆者として位置づけられる詩人である。ルーはハイリル・アンワルとの出来事を小説「夜会」に書いている。「夜会」は1948年に書かれた小説で、1人称の「私」を主語とし、ルーの実体験として読まれることが多い。あらすじは以下のとおりである。

「私」は、ジャカルタに着いて間もなく青年文芸サークル⁹⁾に参加し、そこでハイリル・アンワルと知り合った。「私」とアンワル¹⁰⁾は、一緒にいると率直で正直になるせいか、少しの遠慮もなく互いの短所を批評し、しばしば激しい口論になった。ある時「私」は怒りにまかせ、荷物をまとめボゴールに帰ってしまった。しかしボゴールへの道中で「私」は、アンワルは気性は悪いが結局のところいいやつだと次第に思い直すようになり、「アンワルは今頃何を書いているのだろうか？」などと思いを馳せてしまうのであった。「私」を煩わせるのは、アンワルの屈強な性格ではなく、彼にいくら腹を立てても、彼への思慕を断ち切れない自分自身なのであった。

「私」はジャカルタに戻るが、ほどなくしてアンワルと再び激しく口論し、ボゴールに帰ってしまった。

8) 歴史的な視点からの研究に[張 2017]がある。ルーの著作に「華僑から華人へ」という政治的アイデンティティの変化を見だし、その1つの背景としてルーのインドネシアでの経験を位置付ける。インドネシアを流浪するなかで貧困、孤独、病氣、失恋を経験したルーは、中国文学を手引きに自我の成長と啓蒙を得たとし、そこに東南アジア性と中国性との複雑な交差を見る。ルーはインドネシアに離散する華人の脆弱性を描き、オランダ植民地統治者、日本軍、インドネシア人に対する批判を潜ませつつ、人類の公正と尊厳を守る政治へのあこがれを描いていると指摘する[張 2017]。しかし張の議論は歴史の理解が浅く、歴史に対して新たな視点を提供するものではないという点で歴史研究ではなく、そのため文学研究としても中途半端なものとなっている。

9) 原文では「蟻社」と書かれている。インドネシア語でこれに相当する組織があるのかは未確認である。なお上海で1930年に蟻社という青年文芸組織が設立されていて、図書館や塾、劇団や合唱団をもち、のちに抗日活動を展開していった。ルーは小規模の民間の青年文芸組織という意味で、蟻社の語を使ったと思われる。

10) ルーは作中でハイリル・アンワルをアンワルと呼んでいる。本論でルーの著作において言及されるアンワルは、ハイリル・アンワルを指す。

ちょうどアンワルの詩を訳し始めた時だったので、これは「私」にとって不幸なことであった。しかしボゴールで魅力的な女性と出会えた。ジャワ人を母親に持つ霞という女性で、肌の色は黒く、笑顔がとても甘い。霞と出会えたので、「私」は今までばかりはアンワルに感謝するのであった。

「私」は霞の勧めで、霞と一緒にジャカルタに戻った。青年文芸サークルに行くと夜の集いが行われていた。最初にアフアンディ (Affandi)¹¹⁾ がやってきた。「私」の背中を力強くたたき、霞の手をぎゅっと握り、彼女の美しさを愛でる詩を語った。その時、アンワルが机の上に飛び乗り、アフアンディへの詩を朗読した。雷のような拍手がとどろき、この詩の誕生を歓迎した。「私」たちはアンワルに乾杯した。「私」は、文化人は同志愛に満ちていると感じた。彼らのおかげで文芸サークルは、霞にとってもう見知らぬ場所ではなくなっていた。友情は春の潮のように室内に沸き上がり、霞は自身がもう「私」たちの一員であると感じていた。

集団生活はまるで個人主義が存在することを認めないかのようだ。文芸サークルではみな蟻のように、個人の色も独特の性格も私欲もなかった。歌を歌う時にはみな一緒に歌い、踊るときには手をつないで踊った。しかしよく見ると、みな独自の表現をもち、それぞれがもつ歴史は多様であった。作家、詩人、歌人、学者がいて、銃を携えている人もいた。彼らは共通の目的をもっていた。すなわち、広野を開墾し、輝かしい文化都市を作ることだ。文芸サークルは文化砂漠のオアシスのようで、流浪に疲れた者が休息し、闘志を蓄え、新しい喜びを迎えるところであった。しかし生活の戦場で敗れ、立ち上がれない者もいた。その晩その場にいない者について話すとき、「私」たちはその人が倒れて亡き者になってしまっているのではないかと不安になった。

「私」は霞と帰途についた。チリウン川に差し掛かった。霞の故郷から流れる川だ。霞はふと立ち止まり、静かな川面を見つめた。「私」は思わず、アンワルを好きになってしまったのかと霞に尋ねた。霞は、アンワルが「私」を愛しているからアンワルを好きだと

言った。また、霞は、アンワルたちが「私」の新作の詩について熱く討論しているのを聞いて誇らしく感じたと言った。「私」は霞を抱きしめた。

ルーは実際にハイリル・アンワルと親交があった。1960年8月5日にテレビ・シンガポールで放送された「インドネシア文学講座」第8回で、ルーは「インドネシア人民の詩人——ハイリル・アンワル」と題してハイリル・アンワルを紹介した[南洋商報 1960]。そのなかでルーは、ハイリル・アンワルが「おれ (Aku)」を書いてきた時にハイリル・アンワルと出会い、何度も一緒に痛飲したと明かしている。ルーは「夜会」でハイリル・アンワルの気性の激しさを書いており、上記の講座でも、ハイリル・アンワルは気性が悪く、集まりの最中にも短気を起こして出て行ってしまったと述べている。しかしルーは、「詩人の命は烈火のみで満たされている」とする文芸評論家のヤシン (Hans Bague Jassin) の言葉を引用し、詩人であるハイリル・アンワルは内に強烈な欲望と熾烈な火をたぎらせているため、怒りっぽいのも不思議なことではないとハイリル・アンワルを擁護する[魯 1960: 20]。

「夜会」には、インドネシア語で文芸活動を行う青年たちがジャカルタのとある場所で集い、そこではどのような背景を持つ人であっても分け隔てなく同志として受け入れられる様子が描かれる。インドネシア語を共通語として腹を割って話し合い、互いの作品について熱く語り合い、時には衝突し合いながら同志愛が醸成されている様子が描かれている。「私」の背景は明らかにされないが、ルー自身として読むのが自然で、そのことをルーも否定しないであろう。華人である「私」は、ジャカルタの青年文芸サークルに居場所を得ていると感じ、その場を心地よく思っていた。ルーとハイリル・アンワルはしばしば仲たがいでいってしまうが、それは2人が腹を割ってあまりに率直に話し合える間柄だったからこそであった。こうした「私」をとりまく状況を、華人とジャワ人の混血であると思われる霞がほほえましく見守り、それにより「私」は肯定感を得ている。

ルーは上記の講座で、ハイリル・アンワルは狭量な人種主義者ではなく、全人類に詩を捧げるべく創作していたと訴える[魯 1960: 20]。「夜会」で書かれている様子は、おそらくルー自身が実際に体験したもののなのであろう。

ルーは、インドネシアでもマラヤでもシンガポー

11) 1907年にチレボンで生まれた画家。モダニズムの画風で知られる。1948年にジャカルタでインドネシア画家連盟 (Gabungan Pelukis Indonesia) を設立した[1907年にチレボンで生まれた画家。モダニズムの画風で知られる。1948年にジャカルタでインドネシア画家連盟 (Gabungan Pelukis Indonesia) を設立した [Sambrani 2016]。ハイリル・アンワルは「アフアンディへ」と題する詩を1946年に書いている。

ルでも、マレー語文芸界でハイリル・アンワルが熱狂的な人気を得ている様子を以下のように伝える。シンガポールとマラヤのマレー人文芸青年が夜会を行う時、その多くはハイリル・アンワルをテーマとした夜会である。ジョグジャカルタでも、ジャカルタでも、メダンでも、シンガポールでも、文芸青年たちの集会では不朽の名作「おれ」を必ずみなが読み上げる。インドネシアとマラヤで刊行される文芸書や教科書のほとんどが「おれ」を掲載している[魯 1960: 19-20]。

ルーはハイリル・アンワルがこれほどまでに支持されている理由として、ハイリル・アンワルが民族革命闘士であるためとして、以下のように論じる。ハイリル・アンワルは日本軍政期のメダンで反帝国主義を題材とした詩集を次々と刊行し、地下に流通させた。オランダとの独立戦争の際にはジャワ島の戦場を回り、自身の詩を朗読した。その詩は力強さと生命力に満ち、時代の痛みを反映し、決意と希望が憂いと失望と混在している人々の気持ちを歌い上げた。詩を有力な武器にして、敵を猛烈に打ち破り、腐敗した役人の仮面を打ち砕き、人民に生きる意志を鼓舞した。ハイリル・アンワルは想像力が豊かで、字句を柔軟に操り、インドネシア語を古い文法の束縛から解放し、新たな革命的なスタイルをもつ作風を打ち立て、インドネシア語文学とマレー語文学を復活させた。インドネシアとマラヤの新時代の作家たちは、闘争精神と英雄の気概に満ちたアンワルの詩に啓示を得て、その斬新なスタイルや表現技巧をまねるべく先を争っている[魯 1960: 19-20]。

ルーは、ハイリル・アンワルの作品がロマン主義や自由主義、感傷主義など、どのように評されようとも、インドネシアの人たちはハイリル・アンワルの忠実な心を愛し、彼の詩を熱く愛するとする。ルーは、自身の遺作がインドネシア語とマレー語の新文学にこれほど大きな影響を与え、新興の2つの兄弟国の文学を復活させる礎になるとは、ハイリル・アンワル自身も予想しなかっただろうと述べる[魯 1960: 20]。

ルーはハイリル・アンワルを、文学の主義・流派や旧来の形式にとらわれず、豊かな想像力で作品を創出したことを評価している。この評価は、ウォンやテオのルーに対する評価と重なっている。ルーもまた、ハイリル・アンワルのスタイルや表現技法をまねるべく先を争っている1人であったのだろう。

ルーにとってジャカルタの青年文芸サークルはと

ても心地がよかったはずなのに、ルーはそこにとどまらず、ほどなくしてシンガポールに戻った。ルーの著作に明確な理由は示されていないが、1つの背景は独立戦争中のインドネシアにおける華人の生きにくさだったのではないかと思われる。「戦争捕虜」には、インドネシア人民のオランダとの戦争を支援する気持ちと、インドネシアの民兵による華人の大量虐殺への苦悩との間で板挟みになっているルーの心情が描かれている。「負傷兵」という作品にも、民兵が打倒すべき有産階級の華人から軍事費の徴収を行っている矛盾が描かれている。

おわりに

ルーはシンガポールに戻り、シンガポールおよびマラヤで、ジャカルタの文芸サークルで経験したような世界を打ち立てようとしたのかもしれない。マレー語を国語とし、国語を核として多民族が意思疎通を行い、それぞれの背景を問わず分け隔てなく互いを同志とするような国づくりを目指し、その手段としてペンを執って創作することを選んだのかもしれない。

マレー語を核とした国づくりを夢見たのはルー1人ではなかった。1940年代から60年代のシンガポールには、華語で教育を受けた知識人のなかに、マレー語を学び、インドネシアに留学し、インドネシア文学に強い関心を寄せる人が数多くいた。

シンガポールはマラヤとの合併を夢見ながら、1963年までどのようなかたちで独立をするのか模索を続けた。シンガポールには、周囲の国づくりを観察しながら、国づくりをじっくりと構想する時間が相対的に長く存在した。1940年代から60年代にシンガポールを拠点に、華人がどのような国づくりを構想していたのかを、実現されなかった構想も含めて検討することで、マレー世界において華人がどのように他の民族と関係を構築し、どのような社会を構築しようとしていたのかを知ることができるであろう。そこで構想されていたことは、今日の現実社会が抱えている課題に対して、取りうる他の選択肢を提示するものとなるのかもしれない。

参考文献

日本語

篠崎香織 2020 「1950-60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差」
光成歩・山本博之編著『『カラム』の時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 61-74。

英語

Sambrani, Chaitanya. 2016. “Affandi (1907–1990)”,
Routledge Encyclopedia of Modernism,
Taylor and Francis, viewed 12 February 2021,
<https://www.rem.routledge.com/articles/affandi-1907-1990>, doi:10.4324/9781135000356-REM2089-1

華語

魯白野 1960 「印尼文学講座」『南洋文摘』12、pp. 8-22。

魯白野 2019a(1953) 「弔古墳場」魯白野(周星衢基金編注) 2019 『獅城散記』(新編注本)新加坡:新加坡周星衢基金、pp. 282-286。

魯白野 2019b(1953) 「無冠皇帝的苦痛」魯白野(周星衢基金編注) 2019 『獅城散記』(新編注本)新加坡:新加坡周星衢基金、305-306。

南洋商報 1960 「印尼的人民詩人K.安華——魯白野播出印尼文化第八講」『南洋商報』1960年8月6日。

片影 1954 「印尼通訊——与共党闘争中の印尼自由僑教」『自由中国』10(10)、1954年5月16日、pp. 22-23。

王潤華 2019 「重讀魯白野」魯白野(周星衢基金編注) 2019 『馬來散記』(新編注本)新加坡:新加坡周星衢基金、pp. 6-25。

威北華(張景雲編) 2016 『威北華文芸創作集』
Petaling Jaya: 有人出版社。

吳小保 2015 「魯白野与馬來巫想象」『当今大馬』2015年9月17日、<https://www.malaysiakini.com/columns/312503>。

張景雲 2016 「編者序」威北華(張景雲編) 2016 『威北華文芸創作集』Petaling Jaya: 有人出版社、i-iv。

張松建 2017 『後殖民時代的文化政治——新馬文学六論』新加坡:八方文化創作室。

張澂綺 2018 「〈南洋文芸〉以後、不說再見的副刊」『当今大馬』2018年1月8日掲載、2018年1月11日更新、<https://www.malaysiakini.com/news/407926>。

周星衢基金 2019 「魯白野(1923-1961)紀事年表」魯白野(周星衢基金編注) 2019 『馬來散記』(新編注本)新加坡:新加坡周星衢基金、pp. 27-30。